

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第 8 条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

フリガナ 氏名 (姓、名)	タキモト ブンジ 瀧本 文治	授与番号 甲 1467 号
学位の種類	博士( 経済学 )	授与年月日 2021 年 3 月 31 日
学位授与の要件	本学学位規程第 1 8 条第 1 項該当者 [学位規則第 4 条第 1 項]	
博士論文の題名	近代中国ガス産業史の研究 —上海市の事例—	
審査委員	(主査) 金丸 裕一 (立命館大学経済学部教授)	細谷 亨 (立命館大学経済学部准教授)
	吉田 建一郎 (大阪経済大学経済学部准教授)	
	<p>本論文は、上海市に事例を求め、近代中国ガス産業の史的展開を明らかにするものである。ガス産業は、社会の変化や近代化を考察する上で極めて重要な産業であるが、近代中国経済史研究においては全くの空白であった。経済史のみならず、工業史や都市発展史においても真正面から扱った研究は無く、関連の社史などで断片的な紹介は散見されるものの、全くの未開拓分野であった。本論文では、上海市档案馆に所蔵される一次史料のほか、国内の多くの関連貴重史料も駆使し、丹念な史料分析を通じて、近代中国経済史におけるガス産業の展開過程、および歴史的意義を考察した。</p> <p>「はじめに」において先行研究の動向が整理され、問題意識と研究手法が提示される。</p> <p>第 1 章「近代上海ガス産業の史的展開」では、外国資本の上海ガス事業進出過程を考察する。1862 年にイギリス租界内で設立された「英商上海自来火房」によって、東アジアで初となるガス事業の端緒が開かれた。その後、フランス租界内にも「仏商上海自来火行」が設立される。しかし、同社は後に消滅し、日中戦争が勃発するまでは、イギリス資本が上海市のガス事業を独占していた。ガス事業には、民族系やほかの外資系会社が参入しなかった。瀧本は日中戦争期までの上海ガス事業の特徴として、イギリス資本による外国人顧客を対象とした限定的な事業展開を強調する。そして、一般中国人家庭には普及しなかった限界にも触れ、奢侈産業たる性格を指摘した。</p> <p>第 2 章「東邦瓦斯株式会社の社史的考察」では、日中戦争期以降に上海ガス事業に参入する東邦瓦斯株式会社について、その前史とも言える同社の国内における事業展開史を考察した。ここで瀧本は、明治期以降の東邦瓦斯株式会社の発展過程において、東邦電力株式会社との関係性を強調する。つまり、明治期以降、国内では雨後の筍のようにガス会社が乱立していくが、社会的需要からみれば電力の存在感が徐々に大きくなりつつあった。東邦瓦斯と東邦電力の競合は、当時日本のエネルギー部門の動向を象徴し、すでに「電優瓦劣」という力関係が確立していた上海を後追いするかのよ</p>	

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">論文内容の要旨</p>	<p>うな兆候が国内でも見られていた。瀧本は、こうした産業史の特徴を強調しつつ、本章で戦時上海ガス事業に進出する日本資本の概要を明らかにした。</p> <p>第3章「戦時期上海のガス産業」では、日中戦争期に設立された大上海瓦斯株式会社の設立経緯と、その後の会社事業の実態を考察する。大上海瓦斯株式会社は1937年12月27日に設立され、東邦瓦斯の技術者によって現場作業が支えられていた。瀧本はここで、「電優瓦劣」という上海のエネルギー部門を特徴づけていた関係性に立脚しつつ、戦時期の日系資本によるガス事業を以下の通り評価する。大上海瓦斯は、在来イギリス系上海瓦斯株式会社（前英商上海自来火房）を圧倒することなく、極めて低調な事業成績であった。そして、アジア・太平洋戦争期に入ると、大上海瓦斯は上海瓦斯株式会社の経営も委託されるが、1944年9月末の総需用家数は20,583戸に過ぎず、そのうち19,196戸（93.3%）が前上海瓦斯株式会社の需用家であった。大上海瓦斯が新規開拓した需用家はわずか1,387戸（6.7%）であり、同社はイギリス系ガス会社接收後に事業規模こそ拡大したが、「電優瓦劣」の力関係を覆すことはなかった。そして、主業のガス販売では到底採算が見込めず、ガス生産過程で産出されるコークス等の副産物収入に頼らざるを得なかったとする。</p> <p>補章「戦時期中国経済と日本語史料—『大陸会社便覧』について」では、占領地における企業経営の実態を把握する際に、日本側の史料は如何にして扱われるべきなのかが詳論された。そもそも、戦時期の中国経済史研究は、残存する史料がどれほどあるのかも不明な部分があり、実証研究が極めて困難な分野である。もちろん、戦時期には虚偽の報告や数値など、扱いが非常に難しい情報も多く、こうした史料や情報の限界性を認識しつつ、如何にして史実を発掘するのが課題となる。瀧本は『大陸会社便覧』について、それは一定のまとまった情報に触れることができる貴重史料であると注目した。この史料は、ガイドブック的な限界はあるにしても、使い方によっては細部を探る上で極めて貴重な情報源であり、実際にここに掲載される各社の概要からは占領地事業の実態解明に繋がる要点が多く含まれるとする。こうした史料分析は、占領地研究における基礎作業として極めて重要であり、瀧本によって『大陸会社便覧』の全体像・史料価値が明確に示された。同時に、本研究における日本語史料利用に際する心構え、史料論が披露された一章となっている。</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">論文審査の結果の要旨</p>	<p>本論文の研究史上の意義は、次の通りまとめることができる。</p> <p>まず、ガス産業という近代中国経済史の新たな分野を開拓し、その位置づけと歴史的意義を考察したことである。例えば、日本のガス産業と比較した場合、上海では日本に先駆けて事業が進展していたが、その後は規模が急激に拡大することはなかった。ガスはあくまでも租界内の外国人が主要顧客であり、中国人社会には広く普及しなかった。莫大な設備投資や提供価格、そして実際の生活における必要性などから見て、ガス産業は当時の外国人社会と中国人社会でそれぞれ異なるエネルギー需要を反映していたと言えよう。瀧本が明らかにしたガス産業の特徴は、当時中国社会における人々の合理的選択を顕著に反映していたのみならず、社会インフラとしての地位の低さが看取された。つぎに、上述の内容と関連して、近代中国経済史・工業発展史、そして都市発展史における「電優瓦劣」という関係性を明らかにしたことである。電力供給が</p>

	<p>一般中国社会にも普及していく一方で、ガス供給は限定された地域に止まった。瀧本は「電優瓦劣」という上海で見られた力関係は、同時期の日本よりも更に顕著であったとする。こうした社会発展を牽引するエネルギー部門において、電力産業との関係性は、日中両国の比較を含めたガス産業史を明らかにすることで初めて提示し得た貴重な視座であろう。</p> <p>無論、課題としては「副産物」たるコールタール生産・販売が主軸とならざるを得なかった戦時期中国における段階的／類型的特点に対する評価の確定、あるいは日本・中国、更には東邦瓦斯という一企業にとどまらないガス産業史全体をも展望し得る共通した時期区分の提示など、検討すべき論点が残っている。とはいえ、本研究を通じて明らかにされた中国近代ガス産業の実証像、あるいは電力との関係性などをめぐる新知見を土台として、更に多くの関連する経済史的問題が明らかにされて行くことが期待できるのであり、その学術的価値は極めて高いと言える。</p> <p>以上を2021年1月14日に開催された公聴会において確認した結果、審査委員会は一致して、本論文は本研究科の博士学位論文審査基準を満たしており、博士学位を授与するに相応しいものと判断した。</p>
試験または学力確認の結果の要旨	<p>本論文の公聴会、および口頭試問は、2021年1月14日(木)16時30分から18時10分まで、「エポック立命21」3階K306にて行われた。公聴会および口頭試問では、瀧本が本論文の概要について説明をした後、中国経済史や日本経済史の視点から質疑応答がなされた。審査委員会は、瀧本がこれまでの精力的な研究活動を通じて、独創性を多く含んだ新たな成果を学术界に提示したこと、今後の課題も明確にされていることを高く評価した。公聴会および口頭試問においても、的確な報告・応答ができていたことから、博士学位授与に相応しい能力を有することを確認した。また、これまでに公表された論文を通じて、外国語運用能力の高さについても確認した。したがって、本学学位規程第18条第1項に基づいて、博士(経済学 立命館大学)の学位を授与することが適当であると判断する。</p>